8 月 26 日　：　『トイレの神様』と『芭蕉布』

朝、7 時頃にヴィクトリーエグセブティブホテルを出て、7 時 30 分ごろにヴィクトリーモニュメント駅に到着。タマサート大学の生徒であるナッター、ナッチャーと集合するはずだったのだが、彼らは渋滞に巻き込まれ到着が遅れた。一方、僕はおなかがゆるくなり、顔面蒼白でトイレを探していた。駅の高架橋から隣のビルに通路が伸びていたのでそこに入ってみると、「まだビルは開店時間じゃないからどこかいけ」みたいなジェスチャーをされ、仕方がないとあきらめて、駅の窓口でトイレの居所を聞いた。すぐそばに有る、と言われたのだが一向に見つからない。着替えを覚悟しなければならないかと思う中、近くをあるいているおじさんにトイレはどこか聞くと、通りを曲がったところに有る、と教えてくれた。やっとこさ公衆トイレを見つけたのだが、どのトイレもしまっており、一人が並んでいた。僕が来たところでその一人がすぐにトイレに入ったのだが、そこから 5 分くらいして一番奥のトイレのドアが開いたのだが、そこには一応列を離れてそのドアの前に並んでいる人が一人いた。まだ入れないか、と僕が一瞬間絶望しているとその青年がこちらを向き、すっと手をトイレの方に差出し、「お先にどうぞ」のジェスチャーをしてくれた。こうして、朝からタイのコンビニで着替えを買う事態は未遂に終わった。他人の調子が悪い様子は、国が違えどわかるのであり、それを見て同情しトイレの順番を譲ってあげる気持ちに、どこか通じるものを感じた。彼の心遣いが心底嬉しかった。「コップンカーップ」でも「ありがとう」でも言い表せそうにない。

その後、大槻先生と合流しラヨーン向けのバスを待っていたのだが、渋滞から抜け出したナッターとナッチャーが 8 時 30 分くらいに合流し、バスが違うということで別のパスステーションに移動して、やっとラヨーン行きのバスに乗れた。ここのバスステーションからでるバスの方がバンジャムルンに近いところまで送ってくれるからだ。バンジャムルンに近いバス停に着くと、バンジャムルンのコミュニティセンターのスタッフのプンさんと運転手の人が待ってくれていた。

バンジャムルンのコミュニティセンターではタイの伝統的な料理を出された。カッピーという、エビの塩辛のようなペーストに野菜をつけて食べる。辛いけどうまい。カッピーはごはんのお供にもなりそうだと思った。高知の飯盗（酒盗）のような感じだろうか。ぼくは塩辛や酒盗よりもカッピーが気に入った。昼食中も村の人々が積極的にタイ語で話しかけてくれ、旅の指さし会話帳でコミュニケーションを図りながらランブータンがタイ語で「ンゴー」ということを知った。「ンゴー」は日本語で何かと問われたが、「ランブータン」自体が日本由来の言葉ではないため、すこし困った。しかし「ランブータン」という発音方法は英語でもないし、原産地のマレー半島の発音方法でもないのだろうから、ぼくらが発音する「ランブータン」は「日本語」と言ってもかまわないのじゃないかとも思う。

ご飯の後は昼寝をして、プンさんの家の裏に有る寺を見たり、明日のランチの仕込みの準備を手伝ったりした。寺には卒塔婆みたいな塔がたっており、一つの塔に二人祭られているようだった。塔を「シェア」しているのだろうか（笑）バンジャムルンの人々の宗教観が気になる。4 時になってガイドのローさんと村の人々数人でバンジャムルン観光に行った。エビの養殖場、ビーチ、田んぼなどをオープンバスから眺め、マングローブ林、漁港、マングローブ林がつながっている海、ラヨーン県出身の詩人の公園を訪れた。マングロー

ブは小魚を守る。小魚が増えるとより大きい魚が増える。その魚を漁師が獲り、小さすぎれば海に帰す。こうすることで生態系を維持しながら生計を立てることができ、sustainableな暮らしができるのだという。沖縄の金武湾の石油中継基地への反対運動をしていた安里清信さんが言っていたことばを思い出したかったが、正確な語呂がでてこない。「海は山の青さに映える」。そんな感じのことばだったと思う。この反石油中継基地計画には原発も含まれていたことが思い出され、タイにいながら高知と伊方原発が思い起こされた。

バンジャムルン観光の後は、シーフードレストランでプンさんの家族や村の人々十人ほどで夕飯を食べた。夕飯で料理の名前をコピーしてリピートすると喜ばれ、盛り上がった。その後、ホームステイ先であるプンさんの実家に帰り、その隣に有るプンさんの家でバンジャムルンのことやぼくらのことについて語り合った。馬路村を知ったきっかけやプンさんが村を起こしたい気持ちを、ことばではなく、プンさんの鼻息から感じた。そんなふうにして初めてのバンジャムルンの夜は更けていった。